

追憶

大分県 周藤 等

私の生まれ育った所は、九州の屋根という高千穂・阿蘇・久住山の一翼を担う、祖母山（一七五八メートル）を水源、分水嶺として別府湾に流れ入る、大野川の上流五十四キロの中程の地点の緒方町です。小学校の童謡唱歌の「荒城の月」の豊後竹田城址は隣町で、山は深緑で水清く、人々の心豊かで人情味は深く住み良い農山村です。

我が家は両親の元に姉二人、兄二人の末っ子の五人兄弟で七人家族でした。家業は先祖よりの農業で、田地一町五反歩を耕作し、畑地も八反歩、山林も少々有りました。年中多忙で、特に春秋の農繁期などお手伝いさんに来て頂いていました。まあ当時は中位の生活状態でした。子供心にも働く事は良き事だと思っていました。

学校も義務教育の六年を経て高等科二年を卒業

しました。当時政府の陸・海軍部が台頭し大きな政治力を発揮していました。私らの後日の知識で「満州事変と満州国建国」昭和七（一九三二）年三月一日、満州国建国宣言、民主協和制、執政・溥儀皇帝陛下が就任着座されました。政府は当時関東軍の中に取り込まれました。

石原莞爾・板垣征四郎等の活躍で「五族協和」といい、満州・漢・蒙古・朝鮮・大和をもつて理想世界の建設が叫ばれていました。そのため「征け満蒙へ」「王道楽土の建設だ」等々のスローガンがポスターに書かれて、役場や警察、学校や公会堂等に配布・掲載されていました。僕も早く一人前の人間となつて親孝行をしようと思つていました。

自分一人では何ができるか、働くのは何が一番かと考え、青雲の志に燃え「男一匹」働くぞの気概に燃えて満蒙開拓義勇軍に応募しました。勿論合格でした。親の承認を受けるに当たり、母親は少し不安のようでしたが了承して頂きました。末っ

子の甘えん坊だったから一入寂しかったのかと思つています。

昭和十三年七月十三日、我十六歳の初陣です。

「満蒙開拓青少年義勇軍」として茨城県内原訓練所に入所しました。出発に際しては大勢の郷土の人のお見送りを受けました。少年男子として必ず成功するぞの心意気で出動しました。同時に入団した同期生は二百三十人でした。日本全国から集いし若人たちです。全員頬を紅潮させ「意気天を突く」の感が溢れていました。

訓練所内ではすべてが軍隊式でした。起床六時、早朝作業、点呼、朝食、前段作業、昼食、後段作業、夕食、学習、点呼、消燈、就寝のすべてでした。

満蒙における開拓団は、明治維新の北海道の屯田兵の近代版ともいうものでした。雄大な満州の荒野の開拓の原動力はすべて馬力を使用するのでそのための馬屋当番がありました。この馬の飼

育や調馬（農耕作業）で特に鋤等を着装して大地を耕作地にするための調教です。そして一旦緩急時には鋤を銃に持ち替えて国防に当たることが要するとのことでした。そのために適格な軍事教練もありました。

三八式歩兵銃による操作、射撃、銃剣術など大切な教練でした。以上はすべて国家のためであり、ひいては自分達のためだと徹底的に教育・訓練されました。この訓練所での訓練は、僅か三カ月余りでしたが十六歳の少年の心には一生を夢見るごとき猛勉強でした。

青雲の志に漲りいよいよ出陣の機到れりで、二百三十人が隊伍を整えて、まず一番に東京二重橋にて宮城を遥拝し、靖国神社に武運長久を祈願する拝礼を行いました。東京駅発車。汽車は汽笛を鳴らし煙を靡かせながら一路西方に向かい疾走しました。時は昭和十三年九月でした。

福井県敦賀の港から、大きな御用船に乗り組ん

で日本海を横断して朝鮮、清津港へ上陸しました。即刻列車に乘車し同日、鮮満国境（個們）を通過して満州国へ入りました。九月十三日でした。

ここよりさらに北上し、満州国北安省鉄驪県に着き、ここよりは徒歩行進にて「鉄驪訓練所」へ入所しました。当時、同訓練所には八千人の開拓団員がいました。渺々たる大平原で、遙か遠く大興安嶺の山波が望めるだけで「一望千里」とはこのような光景かと思いました。

翌日から先輩の指導にて、各々作業（任務）分担及び日課規律（守則）を学びました。すべてが完全な軍隊組織と訓練でした。ただ違うのは階級が無く、先輩も自分達も同一だったことです。銃を背負い手に鋏を持つての作業でした。時には独立守備隊の兵隊さんと一緒に「鉄道警備」の勤務に従事しました。

短い春から夏本番と秋の訪れも早く、寒く長い冬が労苦の種でした。深夜狼の遠吠えを聴いたこともありました。また鹿（ノロ）や山鳥、雉子の

狩猟に行った事もありました。国境線が近いために、ソビエト連邦（現ロシア）との防衛・守備や、現地人の中にも馬賊・匪賊の集団がいるとか、緊張の日々を四力年経過しました。特筆すべきは厳寒時は零下三〇、四〇度となりました。これが最大の労苦でした。

昭和十七年四月、現地にて徴兵検査があり、青少年義勇軍の徴兵検査該当者（二十歳の日本男子）全員受検しました。全員が甲種合格か第一乙種合格でした。第一乙種合格者も全員、甲種合格に編入され、結果的には全員甲種合格でした。

自分は同年十二月十五日付にての入隊でした。部隊は「哈爾濱、関東軍山砲兵第二十八連隊」通称号満州第三七九部隊第二大隊第五中隊に現役兵として入隊しました。開拓団義勇軍の同僚が整列して「万歳三唱」にて見送ってくれました。内地（郷土）からの出征であれば盛大なお見送りで、万歳と歓呼の声や日の丸の旗の波だろろうが、北満

の現地入隊です。

初年兵教育を充分受け、昭和十八年三月第一期の検閲を終了しました。その間ちよつとの時間も有効に活用し勉強を行い、また時には銃剣術にも精励しました。そうした行為が認められたのか、各々一選抜で進級しました。そして中隊長から「周藤、下士官候補の試験を受けよ」と申し渡されました。受験、即、合格でした。そして浜江省阿城の関東軍下士官候補者教育隊へ入隊しました。

厳しい猛特訓でしたが無事教育は終了して、昭和十九年三月三十一日に原隊復帰命令が発令（原隊、斎々ハ爾に移動）され、部隊長へ復帰の申告をして第五中隊勤務が決定しました。

三カ月経過した同年七月一日付にて動員命令が下りました。山砲兵連隊の編成概要は左のようでした。

第一大隊 九四式七五ミリ砲 十二門
第二大隊 九四式七五ミリ砲 十二門

第三大隊 九四式七五ミリ砲 十二門

徒歩中隊 九九式小銃 百五十丁

観測隊、通信隊、輜重隊、兵員三、〇〇〇人

軍馬二三〇頭にて編成されていました。

部隊長 梶松三郎大佐（ガダルカナルの勇

将）

第二大隊長 鬼塚少佐

第五中隊長 渡辺大尉

小隊長 並木中尉

分隊長 森田軍曹

右が自分の直接の上司でした。

大本営はこの頃には「持久戦争でなく決戦戦争の段階」と全軍に指示・指令を発していました。間もなく斎々ハ爾兵営を後に出動しました。南方軍らしいとの噂（流言）がありました。

南満州鉄道を南下、七月七日鮮満国境安東（黄緑江）通過。七月八日釜山着。同十三日乗船出航で門司港に一時停泊、全員船倉に缶詰され、外を

見ることも厳禁でした。要防諜（スパイ）のためでした。

昭和十九年七月十四日、輸送船二隻が駆逐艦「白雪」と今一隻に護衛されて、門司出帆と同時に目的地任務等が発表されました。第十方面軍、秘匿号（湾）台湾に在任。直轄兵団は、五個師団・七旅団・一飛行団で、これに付随して、第三十二軍（球）集団、沖縄等南西諸島配備（隸下部隊）、第二十四師団（山）、第六十二師団（石）、第二十八師団（豊）、第四十四旅団（球）、第五十五旅団（球）、第五十九旅団（碧）、第六十六旅団（駒）、大東島支隊等々に編成されていました。自分達の部隊は、豊第五六四七部隊です。「いよいよ決戦の機至る」だと全員の顔に闘志が漲りました。

昭和十九年七月十七日、沖縄本島の東側中城湾に一時寄港、翌日那覇に入港しました。しかし我が隊は「宮古島守備隊、国島を死守せよ」の命令を受けました。同月二十五日、宮古、平良港入港、

即上陸でした。兵員・武器（火砲）軍馬、弾薬、糧秣等々完全な臨戦態勢です。同日夜半に、宮古島中部の長山（海拔一〇五メートル）の最高地点に本部を設置し、各々大隊、中隊、小隊と分散配備に付きました。

翌日から早速、各陣地の構築です。珊瑚礁の山や海岸線に鶴嘴とスコップで防空壕、待避壕、戦闘壕（たこ壺）等を一生懸命に造りました。そうした時に米軍の偵察機が飛来しました。

昭和十九年十月十日、敵の艦載戦闘機グラマンが初空襲にきました。この時は損害は軽微でしたが、でもいよいよ戦闘開始だと全員緊張の面持ちでした。十月二十日頃から十二月初めの五十日程の間は、早朝から日暮れまで幾百機もの敵機の爆撃を受け、また超低空での機銃掃射、乱射にて海岸線の第一陣地から中央部への第二、第三陣地まで見るも無惨な大打撃を受け、空爆による威力の物凄さは筆舌には表わせられない程でした。

防空壕も戦闘壕も一瞬にして吹き飛び、戦死者

の遺体も四散しました。地上戦闘に対しては充分対抗できる防戦訓練を行っていましたが、空への（対空戦）攻撃に対しては残念ながら無策でした。敵機の我が物顔での跳梁は恨みに思うものの詮方なしでした。艦砲射撃と敵軍の上陸の無かったのが救いでした、と今も懐古しています。

昭和十九年十二月十日、第二大隊長・鬼塚少佐から呼び出され「周藤伍長は兵十人を指揮して、現在、宮古島における戦死二一〇柱の御遺骨を鹿兒島へ護送せよ」との命令を受けました。復唱し、各隊からの選抜兵士十人を引率、先導して、海軍の御用船「山下丸」に乗船し平良港を出航しました。十二月十二日の夜半でした。

船長の話では「敵潜水艦及び飛行機の襲撃を回避するため夜間航行します」といわれていました。十八日深夜に鹿兒島港に投錨しました。即上陸です。軍より連絡がなされたため、夜中過ぎでしたが灯火管制の町を威儀を正して山下町の大園

旅館に案内され、翌朝を待ちました。そして失礼の無いように衛兵が立哨し、昭和十九年十二月十九日、鹿兒島西本願寺別院に安置申し上げました。各々原隊へ連絡済みだったのでそれぞれの部隊から「御遺骨受領者」が威儀を正して「お出迎えに来ました」と敬礼をされ、引き取って帰られました。

自分以下十一人は、昭和二十年の正月でしたが、任務終了ですぐ原隊へ復帰しました。しかし船便が無くて困惑していましたところ、ちょうど海軍駆潜艇が「球第五六一一部隊」への補充要員、見習士官以下四十人を乗船されることで、これに同行、同乗させて頂き那覇の港まで帰り、ここからは陸軍機の宮古島への飛行便に同乗させて頂き、宮古平良空港へと帰着しました。即日、梶部隊長並びに鬼塚大隊長へ御英霊護送に対して、無事勤めたと御苦勞の「賞詞」を頂戴しました。

昭和二十年三月末より米軍機が一日に何回も飛

来し偵察を行うようになりました。そして四月一日より沖縄戦開始となりました。沖縄本島近海は、米・英・豪連合軍の艦艇が海を埋めつくしました。十八万余の大軍団が上陸し、迎え打つ日本軍は第三十二軍、牛島中将の率いる「山兵团」「石兵团」と海軍根拠地隊等、合計七万七千人と県民義勇軍二万五千人でした。

四月六日、帝国海軍は「菊水一号作戦」を発令し、戦艦「大和」率いる巡洋艦以下八隻が沖縄を出撃しました。これは同四月七日、沖縄第三十二軍の総攻撃に呼応するためでしたが、敵機動部隊の空爆により、我が戦艦四隻沈没、駆逐艦等小型軍艦のみが帰投するという惨状でした。

陸軍部隊も全滅玉碎に等しき惨状を呈しました。六月十九日牛島軍司令官は各方面に決別を打電しました。辞世には「秋をまたで、枯れ小島の青草は、皇国の春に、蘇へらなむ」と。今一首「矢弾つき、天地染めて散るをても魂かへりつつ皇国まもらむ」と詠み、長勇参謀長と共に切腹自決され

ました。

また先の十八日から二十三日にわたり、沖縄師範学校女子部、沖縄第一高等女学校生徒等による「ひめゆり部隊」が戦死及び自決者多数にいたりました。軍部も各部隊首脳は自決しました。

十三日間に軍人、軍属、一般国民等の戦死傷者十八万六千五百人にのぼったのです。

昭和二十年六月二十五日、大本営は沖縄戦終焉を発表されました。宮古島は敵の上陸が無かったのですが、もし上陸したら本島同様の惨状になったと思います。空襲のみで自分は助かったのだ、上陸を見、砲火を交えたら自分は一番に戦死しただろうと思います。

昭和二十年八月十六日、全員集合命令で整列しました。部隊長が厳粛な面持ちで「昨日正午、天皇陛下の玉音報告がありました」と『終戦の大詔が下された』ことを下達されました。全員寂として声なしでした。

それから五日程経過した頃に、米軍が上陸して来ました。士官による武装解除が始まり、各火砲はじめすべての武器、手榴弾に至るまで、全部員数を照合して提出しました。以後我々は戦場犯罪者（PW）として米軍の指揮にて諸作業、特に米軍が使用する中飛行場の修復、整地等に従事させられました。給与は米軍食糧でした。穴倉生活から「テント村」の生活になりました。

私はこの頃「マラリア」に罹病していました。これは熱帯マラリア三日熱といって発病すると悪寒が走り、数十分後に四〇度以上の高熱が出ます。時には意識が無くなりました。

昭和二十一年二月五日、復員命令にて平良港を出帆し、神奈川県浦賀港に上陸しました、二月九日のことでした。そしてマラリアが再発したために、即東京赤羽陸軍病院へ入院せよでした。

三月二十五日退院して、ここで復員となりました。

一目散に大分県へ帰りましたが、列車は鈍行で遅く満員でした。車窓から目に写る風景は、すべて破壊され焼野ヶ原でした。ただ呆然と言うか茫然自失の状態でした。大分の駅頭にて両親の顔を見て「ホッと」言葉も無くなりました。十六歳の少年の時以来の再会です。自然に目が曇りました。母は声を上げて泣いていました。

当日は別府温泉に親子三人で一泊し、山程有る話の中でも、少ししか話ができませんでした。長兄は支那事変に昭和十二年から二カ年間行って凱旋したものの再度召集令状にて出征し、パレンバンに落下傘降下した部隊でした。次兄は海軍の志願兵として軍務に服し、二等巡洋艦「阿武隈」に乗務し、後に駆潜艇に組み、昭和十八年九月、レイテ島ホルモック湾にて九十人の戦友と一緒に艇が轟沈しました。

三人の男の子供のうち二人無事に帰ったことは「喜ばしい」と父は言ったのですが、母にとつては一人欠けたことにちよつと寂しそうです。

こうして懐かしき故郷に八年ぶりに帰りました。山も小川も古びた家々も少しも変わらず私を迎えてくれていました。熱いものが胸いっぱいになりました。

終わりに臨み、広島、長崎の原爆にて多くの一般市民までの犠牲者、また沖縄戦にても逝去された多数の一般国民に対しては、私は言葉が見出し得ません。ただ二度とあのような悲惨な戦争の無きを念じます。